

続・体験的・株式投資論

(投資と投機の狭間の中で)

1ヵ月ほど前のことだったが、TVがある証券会社の1室に集まった個人投資家達を映し出していた。4、50人はいたろうか、比較的若い人達が多かったように見えたが、TVはこの個人投資家を「デイ・トレーダー」と呼んでいた。アナウンサーの質問に、職を辞めてこの世界に飛び込んだと答えている人もいて驚いた。

インターネットの普及と共に、デイ・トレーダー(ネット上で日々株式を売買して売買益を挙げることを目的とした米国で生まれた個人投資家の総称)と呼ばれる人達が日本でも誕生しているとは聞いていたが、実際目にしたのは初めてだった。このデイ・トレーダー達は、株式の短期売買で生活を立てて行こうなどと本気で考えているのだろうか。私には彼らの哀れな末路が見えるような気がした。1年後その席にいるデイ・トレーダーは殆どいないに違いない。

先週のレポートで、株式の短期売買で継続的にキャピタル・ゲイン(儲け)を挙げることは殆ど不可能だと申し上げた。実際株式投資を行っている方には不愉快な言いようだったと思うが、私は本当にそう思っている。云い足りなかった部分を含め、もう少し詳しく書いてみたい。

一般的に云って、短期売買を行う個人投資家には弱点が三つある。第一に投下できる資金が少ない、第二に投資手法が劣る、そして第三には正確な情報が少ない、この三つである。この弱点に先週申し上げた個人投資家の避けられない傾向(損切りが出来ない、ムードに流され易い、勉強時間がとれない)が加わって、9割以上の方がやられてしまうのだ。

短期売買は殆どゼロサムの世界である。誰かが勝てば誰かが負ける。その勝敗の確率は1/3である。上がるか、下がるか、あるいは横這うか、その3つの状況下で勝つ確率は1/3に過ぎない。最初から確率1/3の世界で、しかも兵糧(資金)と武器(投資手法と情報)が限られている個人投資家は、既に戦う前から圧倒的に不利なのだ。この不利な状況を覆す最大の武器は的確な判断力と胆力(悲観で買い向い、楽観で売り向かえる力)であるが、それを持ち合わせている人は少な

いように思う。

個人投資家の投資手法は、現物を買うか、信用で売りを建てるか買いを建てるか、の3つであろう。それ以外の投資手法を持ち合わせている個人投資家は少ない筈だ。それに対して、証券会社の自己売買部門や機関投資家、あるいは内外ファンDMAネージャーは多彩な投資手法を有している。先物、オプション、スワップというデリバティブ3手法に加え、債券や商品市場との裁定取引なども駆使しているのだ。しかも豊富な資金を持ち情報源にも近い。だから単に武器だけを比べれば、鉄砲で機関銃に立ち向かうようなものだと云っても過言ではないだろう。

実を云えば短期売買で勝つ方法が一つだけある。これは時間を味方に引き入れる方法で、具体的にはオプションの売りを繰返し繰返し行う手法である。オプション市場は買う権利(コール・オプション)と売る権利(プット・オプション)を売買する市場であるが、この両者を売ることで時間を確実に味方に引き入れることが出来る。時間はどんなことがあっても確実に過ぎて行く。株価が上がろうと下がろうと、あるいは横這おうと時間は過ぎて行く。その過ぎて行く時間を味方に引き入れることによって、オプションの時間的価値を利益に転化するのである。

実際これを行っている投資家はいると思うが、残念ながら個人投資家には大きな壁がある。この投資手法には相当額の資金が必要となり、しかも証券会社の説明では「オプション売りの損失は無限大」だから個人はおいそれと近寄れない。

オプションがどうのと云っても多くの個人投資家には関係ない世界に違いない。しかし知っておいて欲しいのは、この短期売買の世界では個人投資家は殆ど無防備に近い存在であることだ。かつて大手証券に所属した者に、業界の隠語で個人投資家をゴミとかカストとか呼ぶと聞いた(もちろん今は違うと思う)が、個人投資家はそのような力弱い存在なのだ。

株式市場が活況を呈してくると参加したくなって来る。逆に低迷していると参加意欲が湧かない。投機の世界でいつも儲けるのは胴元である。胴元に稼がせるために個人投資家は存在するのではない。長期分散投資、これが投資の基本であることは今も昔も変わりはない。